

平成26年 第2回教育委員会会議録

1 日 時

平成26年2月27日(木)

開会 14時30分

閉会 14時55分

2 場 所

教育委員会室

3 出席した委員

金田清委員長、八重澤美知子委員、横山真紀委員、橋正徹委員、中村健一委員、木下公司教育長

4 説明のため出席した職員

池廣巖雄教育次長、平島敏彦教育次長、表純一教育次長兼教員指導力向上推進室長、竹中功教育次長兼学校指導課長、濱辺正実教育次長兼スポーツ健康課長、金戸清外志庶務課長、齊田正活教職員課長、坂井芳子生涯学習課長、中川智夫文化財課長

5 報告案件

報告第1号 平成25年度児童生徒の体力・運動能力調査結果の概要について

報告第2号 平成25年石川県優良部活動指導者表彰(知事表彰)について

6 審議の概要

・開会宣告

金田委員長が開会を告げる。

・質疑要旨

報告第1号 平成25年度児童生徒の体力・運動能力調査結果の概要について
(濱辺教育次長兼スポーツ健康課長説明)

「1 調査の目的」につきましては、本県児童生徒の体力・運動能力及び生活に関する実態を把握し、各学校における体育指導等に活用することであり、小学校4年生以上の全公立小中高等学校の児童生徒を対象とし、本県独自に毎年実施しております。

「2 調査の対象」につきましては、公立小中高あわせて353校、対象人数は8万6,372人でございます。

「3 調査の内容」につきましては、握力、上体起こしなど「新体力テスト」8項目と、運動部やスポーツクラブの所属状況など「生活調査」6項目に関して行っております。

「4 調査の結果（体力合計点）」につきましては、そこにございます体力合計点をもとに説明させていただきます。

体力合計点とは、新体力テストの8項目の記録を、それぞれの項目ごとに1点から10点に得点化し合計したもので、体力・運動能力全般を数値化して表すために使われており、80点満点になります。

「(1) 体力合計点の全体平均」の表をご覧ください。

数値は、小4から高3までの9学年の体力合計点の平均になります。

25年度の体力合計点は、51.93点で年々上昇してきております。

その下の「(2) 体力合計点の学年別平均」の表をご覧ください。

小4から高3までの体力合計点を男女別に載せてあります。

近年5年間におきましては、年度により学年別、男女別の一部で、若干の上下は見られますが、小・中・高の男女とも、全体の傾向として上昇してきております。

「5『平成25年度』と『過去10年間』の平均の比較」をご覧ください。

この表は、新体力テスト8項目の平成25年度と過去10年間の平均を比較したのになります。

○印は、平成25年度が上回っている、▲印は、平成25年度が下回っていることを表しております。

多くの項目で平成25年度が上回っておりますが、「握力」、「ボール投げ」、「立ち幅とび」の3つの項目では下回っている学年があります。

2ページをご覧ください。

「6 総合評価の状況」は、新体力テスト8項目の合計点を、AからEまでの5段階に分類した「総合評価」の、近年5年間の推移を示したものであります。

「(1)の全体（男女）」の表をご覧ください。

数字はパーセントになります。

Aの「優れている」、Bの「やや優れている」児童生徒は、過去5年間で、年々増加しており、Dの「やや劣っている」、Eの「劣っている」児童生徒は、やや減少しております。

A、Bの増加は、体力・運動能力が優れた児童生徒が増えてきていることを示しており、D、Eの減少は、体力が劣る児童生徒が減ってきていることを示しております。

右側にある棒グラフを見ていただければ、21年度に比べ、25年度は、A、Bの割合が増加し、D、Eの割合が減少していることが見て取れるかと思えます。

(2)は男子、(3)は女子の総合評価の割合になります。

男女別で見まして、全体と同様の傾向が見られることから、本県の児童生徒の体力・運動能力は、男女とも上昇傾向にあると考えられます。

最後に、「7 まとめ」でございますが、「調査結果の傾向」としまして、本県の児童生徒の体力・運動能力は、昭和60年頃から低下傾向を示しておりましたが、県・市・町教委や各学校の様々な取り組みによりまして、近年は回復傾向を示しております。

ただ、過去10年間の平均との比較において、小中高の多くの学年で下回っている「握力」、「ボール投げ」の2項目につきましては、重いものを持つ、また、木にぶら下がるなど日常生活の中で握力が鍛えられる機会が減ったことや、うんていや棒登りなど屋外での運動経験が少なくなったことが影響しているためと考えられます。

なお、新体力テストと同時に行いました生活調査の結果からは、昨年までと同様に「毎日朝食を食べる」、「週3日以上運動する」と答えた児童生徒の体力・運動能力が高い傾向にありました。

「今後の取り組み」としましては、児童生徒の体力・運動能力をバランス良く向上させていくことが大切であり、過去10年間の平均値を下回っている「握力」、「ボール投げ」、「立ち幅とび」の3項目については、児童期からその向上を目指した取り組みが必要であることから、専門機関と連携し、科学的視点や裏付けに基づいた実践研究を進めるとともに、「握力」や「ボール投げ」の向上を図るため、鉄棒運動やボール・ラケットを使っての遊び・運動など、小学校から握る動作や投げる運動の経験を多くするよう、各校に働きかけていきたいと考えております。

お手元の冊子32ページから41ページには、本年度の実践研究として、モデル校で行った取り組みなどを載せてございます。

なお、2月20日には、全ての公立小・中・高等学校の体育担当代表者を集めた研究協議会を開催いたしまして、本年度「ボール投げ」と「立ち幅とび」の向上をねらいとしたモデル校の成果を具体的に提示しまして、各学校における体育の授業改善あるいは「体力アップ1校1プラン」の充実を図るよう指導したところです。

【質疑】

(八重澤委員)

「4(2)体力合計点の学年別平均」を見ると、男女ともに、中学1年生になると急に得点が下がっている。

これは、思春期で、身体的に変化する時期であることが原因なのか、それとも他に原因があるのか。

(濱辺教育次長兼スポーツ健康課長)

小学校での記録に対する得点と、中学校以上の校種での記録に対する得点が異なるためである。

仮に小学校6年生では、50m走の記録が8秒ちょうどで、10点満点が付いたとしても、中学1年生に上がると、基準が上の校種のものになるので、同じ8秒で走ったとしても、得点が5点になったり6点になったりすることになる。記録が落ちていることを示しているのではないと思う。

(八重澤委員)

中学校と高校は、同じ基準なのか。

(濱辺教育次長兼スポーツ健康課長)

基本的に同じ基準である。

(横山委員)

県独自の調査なので、全国との比較はできないとのことだが、最近では、「テレビを見な

さい」という叱り文句もあるくらい、子どものパソコンやインターネットの使用時間が長くなっているようだ。パソコン以外にも、アイポッドでラインやSNSを利用することも多いと聞く。

そこで、生活調査の項目に、このようなネット利用に関する項目を加えたらどうだろうか。

(濱辺教育次長兼スポーツ健康課長)

冊子の20ページに生活調査の項目が記載してある。この調査は県独自のものではあるが、小5と中2については全国調査もあり、同じ生活調査の項目で行っているのだから、このようになっている。冊子の18ページから19ページには、パソコンやスマートフォンではないが、ゲームを含むテレビの視聴時間と運動能力との関連を、学年ごとにグラフ化したものを載せてある。

おしなべて、しっかり朝食と睡眠を取り、テレビの視聴時間が少ない生徒の方が、全体的に体力が高い傾向にあるということと言えると思う。

(八重澤委員)

スマートフォン依存症になると、普通の生活が送れなくなり、学校も定時制などに通うようになることがあると聞いていたが、それがこのグラフを見ると明白で、ゲームを含む1日のテレビ視聴時間が3時間以上であると答えた割合が、定時制では3割から4割となっている。人数が少ないために誤差はあるのかも知れないが、心配な気がする。これは、テレビとテレビゲームについての項目だが、時代の変化に応じてスマートフォンなどを新たに付け加える必要があるかも知れないので検討して欲しい。

(金田委員長)

この場にいる者の多くは、体育施設が少なかったために少年野球も経験せず、水泳教室にも行かずに育った世代だと思うが、現在では体育施設がかなり整備されている。

体育施設の充実起因して、特に部活動のない小学生の体力あるいは運動能力に変化は起きているのか。

(濱辺教育次長兼スポーツ健康課長)

あくまでも類推での答えになるが、周囲に自然環境が色濃く残っており、子どもたちが自分で工夫して遊んでいた時代と比べ、現在は、非常に特定された運動やクラブ活動だけを行うという子どもが多いように思う。

確かに、野球クラブに所属している子どもならば、投げる動作は日常的に行っているだろうが、学校全体で見ると、昔のように昼休みにキャッチボールやソフトボールをすることで運動経験は少なくなっているし、遊具の安全性からうんていなどが減ってきているので、握って体を支えるという動作も減ってきていると思う。

このような点がボール投げや握力の低下に繋がっているのではないかと思うが、モデル校からは、ボールを投げるような動作の体操を実践したところ、改善効果が見られたとの報告がされている。

(金田委員長)

県教委が取り組んでいる1校1プランなどでスポーツに親しむことは、時間はかかるかも知れないが、体力・運動能力の向上に効果的だと思う。

報告第2号 平成25年石川県優良部活動指導者表彰（知事表彰）について
（濱辺教育次長兼スポーツ健康課長説明）

この表彰は、学校部活動の指導者として、特に優秀な教職員を表彰し、その功績をたたえとともに、本県教育の振興、発展に資することを目的に実施している知事表彰であり、この度、今週月曜日24日に、運動部15名、文化部3名、計18名の指導者をお手元の資料のように表彰したところでございます。

いずれも、生徒との信頼関係を深め、指導した生徒が全国大会等において、優秀な成績を収めるなど、各部門において卓越した指導力を発揮した指導者であり、今回の表彰を新たな契機として、今後ますます活躍してくれるものと期待しております。

【質疑】

(中村委員)

今回、文化系部活動で3名表彰されていることは、喜ばしいことだ。その中の放送部には、どのような全国大会があるのか。

(濱辺教育次長兼スポーツ健康課長)

平成25年度全国高等学校総合文化祭の放送部門のビデオメッセージ部門で、金沢桜丘高等学校放送部の生徒が優秀賞を受賞している。

(八重澤委員)

対象者の要件に「学校部活動等」とあるが、例えばボランティア活動を指導し、犯罪の防止に役立ったという者は、表彰の対象となるのか。

(濱辺教育次長兼スポーツ健康課長)

「成果として、国際競技大会又は全国競技大会等において、顕著な成績を収めた」ということなので、基本的には部活動が対象だと思っている。

(八重澤委員)

「2 対象者」の(2)の「前号に掲げる者と同等の貢献」とは何か。

(木下教育長)

基本的には、大会における顕著な成績であると理解いただきたい。

(横山委員)

来年も同じ者が表彰されるということが、あり得るのか。

(濱辺教育次長兼スポーツ健康課長)

平成25年1月から12月までの1年間を対象の期間としているので、翌年も生徒が全国優勝するような指導者ならば、続けて受賞することが可能である。今回の受賞者の中にも8回目や4回目の者がいる。なお、初の受賞となる者は、半数の9名である。

・閉会宣言

金田委員長が、閉会を告げる。